

EAA シンポジウム：「敗戦後論」その可能性の中心

JAPAN postwar period 1995-2025 EAA Symposium

1995 年、日本が「戦後 50 年」を迎えた年、文芸評論家の加藤典洋が『群像』同年 1 月号に発表した「敗戦後論」は、敗戦国日本がいまだアジアへの謝罪を為しえていないという問題の中心にこの国の体制・憲法・思想・文学等々の「ねじれ」を見る問題提起の論考であったが、その後、その主張を巡って大きな論争が巻き起こり、非常に激しい批判に晒されることとなった。

加藤の主張に問題があったのだとすればそれは何か？ 大きな論争を巻き起こしたからには何か重要な問題提起があったのだと考えることはできないのか？

加藤に対する批判は何か新しい知見をもたらしていたのか？

30 年経った今の日本の思想は当時の論点を乗り越えているのか？ 今もなお、この論考を読むことに意味があるとすればそれは何か？ 当時、学生としてこの論争を目にした論者と後にこの論争を知った論者を登壇者として、「戦後 80 年」の 2025 年、再び、この論考を問う学術的な場を設けたい。

(呼びかけ人、國分功一郎)



要登録(上記のQRコードよりお申し込みください)
<https://forms.gle/WCw5ZX5GU51rMqni8>
(席に限りがあるため参加をお断りする場合があります)

日時 2025年4月19日10時～18時
2025年4月20日10時～17時
場所 東京大学駒場キャンパス
101号館セミナールーム
主催 東京大学東アジア藝文書院

登壇者

キム・ハン (延世大学)

藤原辰史 (京都大学)

エリス直美 (UCLA 博士課程)

白井聡 (京都精華大学)

王欽 (東京大学)

國分功一郎 (東京大学)